

明日から夏休みとなります。比較的自由な時間が多いこの時期に、わたしから皆さんへのメッセージは、Never too late という言葉です。

意味は、「物事を始めるのに遅すぎるということはない」ということです。既に、cannot ~ too という熟語を知っている人がいると思います。これは、「いくらしてもし過ぎることはない」という意味ですが、否定語と too が同時に使われるという点で、文の基本構造は同じです。

皆さんの中には、やってみたいと思っていることがあるが、その一歩をなかなか踏み出せない人がいると思います。夏のこの時期こそ、思い切ってそういうことに挑戦してみてください。何かを始めるのに遅すぎるということはないのです。例えば、苦手意識があるがやってみたいこと、イベントやボランティアに参加する、学習では、不得意科目のやり直しなど、この時期だからこそやれることがあると思います。

次に、学習において、「伸びるコツ」を繰り返して言っておきたいと思います。それは、学習した内容を脳にインプットし、その後自分なりの形でアウトプットする、ということです。さらに言えば、アウトプットとは「編集して表す」ということです。つまり、学んだことを自分の力でまとめ直して表現する、ということになります。このまとめ直す行為を「編集」と言います。これがなければ学んだことが脳に定着せず、忘れ去られてしまいます。この夏は、指にペンだこができるまで編集して書いてください。

ここで、一ついい話を紹介します。それは、「やる気スイッチ」はある、というお話です。

脳科学の研究によると、我々の脳内にある「側坐核」という部分が実は、「やる気スイッチ」だとわかったそうです。ここに刺激を与えるとやる気が出てくる、というわけです。

問題は、その刺激ですね。これを「作業興奮」といいます。側坐核は約5分間の作業を行うことでスイッチが入るようになっています。従って、皆さんは勉強を始める前に5分間、机やプリントの整理とか、辞書やノートの準備とか、あるいはちょっとしたメモの整理などを行うと、やる気が出てくるということです。やる気スイッチをしっかりと刺激して、この夏の充実した学習を行ってください。

一番のお勧めは、仲間とともに勉強することです。自習室や図書館などで仲間と勉強すると、すぐにやる気スイッチが入りますし、集中力も続きやすくなります。また、休

憩時間もしっかり管理できるはずですね。受験は団体戦ですよ。

最後に読書の勧めの話です。読書は、作者の全人格が反映された作品ですから、それを読むことでその人の思想や知識などを得ることができます。作者は、過去の人でもいいし、外国の人でもいいのです。多くの著者と関わりを持ってください。

さて、今日は英語の原書を勧めたいと思います。外国人の書いたものを読むのに、訳されたものではなく、その人自身が書いた文章そのものを読むということです。翻訳は間に人が介在していますが、原書の英語で読むということは、外国人である著者の英文そのものによって理解するということになり、次元の違う読書という意義があります。とはいっても、なかなか難しいので今日は比較的ハードルの低いものを紹介します。

それは「アルジャーノンに花束を」という本です。作者は、アメリカのダニエル・キースという人です。原題を「Flowers for Algernon」といいます。主人公は、チャーリーという青年です。実は彼には知的障害がありますが、その明るい性格故に周囲の多くの人に愛されています。しかし、彼自身はもっと頭が良くなりたくて願ってきました。その時、新しく開発された脳手術によって知能が発達すると言われたのです。彼はその手術を受け、劇的に優れた知能の持ち主へと変わっていくのですが、それとともに社会性も失われ周囲との関係も悪くなっていきます。そして・・・、あとは読んでみてください。

物語はチャーリーが一人称で語る形式で進みます。最初の英文は間違いだらけで、思わず自分の書く英文を連想してしまいましたが、手術後にはだんだんと正確な英文になり、また内容も洗練されてきます。この英文の変化もおもしろさの一つです。皆さんが英作文で苦勞しているように、チャーリーも多くの文法的ミスを繰り返しますが、それが少しずつなくなっていくところを味わってほしいともいます。

さあ、長いようで短い夏です。一日一日を計画的に過ごし、充実した日々にしてください。「ありとギリギリス」のお話のように、夏に蓄えた知識や演習は冬にその力を発揮します。言い換えると、夏の地道な努力なしには冬の成長はないということです。「努力を蓄える」この合い言葉を胸に、お互いいい夏にしましょう。